

カールグレン氏の *ETUDES* で言及されたモンゴルの諸文献について

吉池孝一

—

漢語の音韻学研究に比較言語学の方法を取り入れ、その基礎を築いたカールグレン氏の *ETUDES SUR LA PHONOLOGIE CHINOISE* (1915-1926年。今は中華民国三十年北京影印本による) はあまりにも有名であり、後代への影響は計り知れないものがある。その *ETUDES* の中にモンゴル語と漢語の音につき言及した箇所がある。その箇所の「モンゴルの諸文献」なるものが何を指すかということにつき、その後一部の研究者の間で多少の誤解が生じ、そのまま現在に至っているように思えるのでここで訂正をしておきたい。

関係箇所は以下の三つ。[]は引用者の補足である。

ア．モンゴルの諸文献 (les textes mongols) において、漢語の無声破裂音 (explosives sourdes) は有声音 (sonores) により表記され、有声音 (sonores) は無声音 (sourdes) で表記された。(24頁)

イ．モンゴル時代の転写 (les transcriptions de l'époque mongole) に保存された言語は、数ある[漢語の]方言の中の一つにすぎないことは明らかである。事実、それはかなり[言語変化]が進んでおり、“古官話”と見なすことができるほどのものであった。例として、止摂の日母に属す諸字はすでに現代官話音の ör に相当近いものとなっていた、口むろの閉鎖韻尾はすでに脱落していた等をあげることができる。(340頁)

ウ．モンゴルの転写 (les transcriptions mongoles) は、規則正しく、無声を漢語の有声にあて、有声を漢語の無声にあてる。ところで、もしも、古代漢語の有声を b,d,g などのように解釈したならば、古代のモンゴル人が b を聞いて p をあて、p を聞いて b をあてたことが全く理解できなくなってしまう。しかしながら、その[有聲の]古代漢語の音声は b', d', g' などであり、そしてモンゴルの無声の p,t,k が[モンゴルの]有聲の b,d,g よりも多くの気音 (plus aspirées) を帯びていたならば---例えばゲルマン語ではそのようになっているのだが---、漢語の b' が、その気音の故に、モンゴル人によって p' のように聞き取られ、そして漢語の弱無声の p (sourde faible chinoise p) が、その気音の欠乏のために b のように聞き取られたとしても何も不思議なことではない。(360頁)

二

アの「モンゴルの諸文献 (les textes mongols)」が何をさすか、この箇所だけではパスパ文字モンゴル語やパスパ文字漢語の文献とも、漢字音写のモンゴル語文献とも受け取れる。しかし、イとなると事情はことなる。「モンゴル時代の転写 (les transcriptions de l'époque mongole)」という表現より、これが漢字音写モンゴル語をさすことはほぼ了解されよう。さらに、「止摂の日母に属す諸字はすでに現代官話音の ör に相当近いものとなっていた」という部分は、中期モンゴル語の語末の -r に止摂日母字の「児」が対応することより「児」はすでに現代官話音のようであった、ということ述べたところであ

るから、『事林広記』所載「蒙古訳語」や『元朝秘史』などの漢字音写モンゴル語文献の漢字音について述べたものに相違ない。ウの「モンゴルの転写 (les transcriptions mongoles) 」は、イの「モンゴル時代の転写 (les transcriptions de l'époque mongole) 」と同種の文献とみてよかろう。また、内容からみて、アはウの言い換えにすぎないから、結局、アの「モンゴルの諸文献 (les textes mongols) 」も含め、すべて、漢字音写モンゴル語文献に言及したものとして間違いはなかろう。

カールグレン 1915-1926 は、漢字音写モンゴル語文献において、モンゴル語の有声音に漢語の全清音 (当時も無声・無気音) 由来の漢字が対応し、モンゴル語の無声音に漢語の全濁音 (当時の音価が問題となる) 由来の漢字が対応していることを認めた。なぜこのような対応となっているか。カールグレン 1915-1926 は、当時の漢語全濁音声母が気音を伴った有声音であったため、同じく気音を伴ったモンゴル語の無声音と、気音という点で一致し、両者の対応が可能となったと考えた。漢語全濁音の推定音価の是非はともかく、漢語中古音との関係という点では、このような論の展開はカールグレン氏にとっては一貫したものであった。

カールグレン氏が見た漢字音写モンゴル語文献が何であったか、今のところ分からない。或いは、生の文献ではなく何らかの論文によったものであるかもしれない。いずれにしても漢字音写モンゴル語文献は限られており、カールグレン氏が我々の知らない未知の文献を見た可能性は低い。現在見ることのできる文献によると、モンゴル語の無声音を表記するために全濁音と次清音 (無声・出気) 由来の二種の漢字が使われている。この点を、なぜかカールグレン 1915-1926 は明示しなかった。また、同書は「その[有聲の]古代漢語の音声が b', d', g' などであり、そしてモンゴルの無聲の p, t, k が[モンゴルの]有聲の b, d, g よりも多くの気音 (plus aspirées) を帯びていたならば」と述べるが、モンゴル語の固有語には無聲の p はなく、したがって、例として p, b を挙げての説明は適当ではなかった。これらの点が、その後の誤解を引き起こす遠因ともなっている。

三

上のカールグレン 1915-1926 の記述を、後の研究者がどのように解釈し利用したか、まことに興味深い。

有坂秀世 1955 (『上代音韻攷』三省堂 1955 年。1992 年の復刊第 1 刷による。なお慶谷壽信・有坂愛彦編『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』三省堂 1989 年所収「有坂秀世博士略年譜稿」によると関係箇所は昭和八年 1933 年に書きあげられたことになる) は次のように述べる。

カールグレン氏はなほ、蒙古人が支那語を写す場合、支那語の有声破裂音には常に蒙古語の無声破裂音を充て、支那語の無声破裂音 (引用者云ふ。原文には単に *sourdes chinoises* とあるが、下文によれば無気的なものを指すこと明かである。) には常に蒙古語の有声破裂音を充ててあることを述べ、之を古代支那語の有声破裂音が出气的であつたことの一證としてある。即ち、この事実は、蒙古語に於て有声破裂音よりも無声破裂音の方が一層出气的なることゲルマン諸国語の如くであつたため、支那語の b' d' g' 等に充てるに出气的な蒙古語の無声破裂音を以てし、支那語の p t k 等に充てるに無気的な蒙古語の有声破裂音を以てしたものと解すれば、最もよく説明がつく、といふ考へである (*Phonologie* 三六〇頁)。併し、如何かと思はれる。如何に支那語と蒙古語の出気状態

が違つてゐたとしても、その故に有声音と無声音とを正反対に聞くといふ道理があらうか。恐らく、蒙古人によつて写された方言では、現代客家音の如く、「清」が ptk のやうな無声の無気音であるのに対し、「濁」が p't'k' のやうな無声の出気音になつてゐたものであらう。(226-227 頁)

有坂秀世 1955 は、明示こそしていないけれども、その文意の流れからみて、カールグレン 1915-1926 の言及した資料を漢字音写モンゴル語文献と見なしていることはまず間違いないであらう。その上で、カールグレン 1915-1926 の説に疑義を呈し、「濁」は現代客家音のように無声の出気音であつたのではないか、すなわち、平声以外の各声調にあつても「濁」は無声の出気音であつたのではないかとする。この説が、カールグレン 1915-1926 の記述のみに基づいたものであるのか或いは実際に何らかの漢字音写モンゴル語文献を検討した上でのものであるのか明らかではないが、現在目にすることのできる漢字音写モンゴル語文献による限りそこで使用されている全濁音由来の漢字の大半は平声字となつているとの印象を受ける。いずれにしても、全濁音の行方については、なお検討を要する事のように思われる。

四

次にドラグーノフ 1930 (A. Dragunov "The hPhags-pa Script and Ancient Mandarin" .1930. 今は T'oung Pao, Vol. (1932) に転載されたものを更に影印した北京・勤有堂書店(1941; pp.627-797) 出版の本による) の関係箇所を検討する。当該の論文はパスパ文字により体系的に元代漢語音を研究した嚆矢とされその影響力は小さくない。さて、ドラグーノフ 1930 は、有声音相当のチベット文字から作られたパスパ文字 (d, g など) に漢語の全清音 (t, k など) が対応し、無声・出気音相当のチベット文字から作られたパスパ文字 (t', k' など) に漢語の次清音 (t', k' など) が対応し、無声・無気音相当のチベット文字から作られたパスパ文字 (t, k など) に漢語の全濁音 (d', g' など) が対応するという事実を示し、次のように言う。

What was the reason why the transcriber rendered the AM. surds by his sonants, and the AM. sonants by his surds? I think that this reason lies not only in the fact that the AM. weak voiceless plosives and affricatives were unaspirated, while the corresponding voiced consonants were aspirated*, but also in the degree of sonority of the latter.

*KARLGREN. Etudes sur la phonologie chinoise, p.360. (p.632)

ドラグーノフ 1930 は、古官話 (AM.) の無声音に有声音相当のパスパ文字をあて、古官話の有声音に無声音相当のパスパ文字を充てるといふ、この一見奇妙な対応を、カールグレン 1915-1926 の古官話の音声についての見解を利用しつつ解決を試みる。どのような解決案を提出したかについてはここでは詳述しない。いずれにしても、カールグレン 1915-1926 の説とパスパ文字漢語の文献がここで出会うこととなつた。ドラグーノフ 1930 のこの箇所は、カールグレン 1915-1926 がパスパ文字漢語の子音の対応について述べたものとして引用しているように見えるけれども、そうではないであらう。いうまで

もなく、パスパ文字漢語文献におけるパスパ文字と漢字の対応はチベット語音と漢語音の問題であり、漢字音写モンゴル語文献における漢字の用法はモンゴル語音と漢語音の問題である。子音に三項対立を持つパスパ文字の暗示する音価の問題と、子音に二項対立しかないモンゴル語音の問題を、直接に結びつけることはできないはずである。この箇所は、カールグレン 1915-1926 の説のうち、漢語音に関する部分を利用したに過ぎない、と私は理解しているけれども、やはり紛らわしい記述ではある。

五

最後に橋本萬太郎 1967 (“ The *HP* ags-pa transcription of Chinese plosives ” , *Monumenta Serica*, 26, pp.149-174, 1967. 今は『橋本萬太郎著作集 第三巻音韻』内山書店 2000 年所収論文による) の関係箇所を検討する。

先ず、パスパ文字 d, g などに漢語の全清音 t, k などが対応し、パスパ文字 t, k などに漢語の全濁音 d', g' などが対応するという事実を示し、このような奇妙な対応を解決しようとした研究者の説を紹介して次のように言う。

Bernhard Karlgren explained the reason for this interchange as follows: if old Chinese voiced stop and affricate initial consonants are taken as [b],[d],[g], etc., then it is incomprehensible that the Mongolian heard old Chinese [p] as [b], old Chinese [b] as [p], etc.; however, if these initial consonants are assumed as [b'], [d'], [g'], etc., and if the aspiration of “p,” “t,” “k,” etc. was stronger than that of “b,” “d,” “g,” etc. in Mongolian as in the case of German then old Chinese [b'] might have been regarded as [p'] by the Mongolian because of its aspiration, and old Chinese voiceless lenis [p] as [b] because of its absence of aspiration. (pp.151-152)

これはカールグレン 1915-1926 の 360 頁の英訳である。橋本萬太郎 1967 は、これを、パスパ文字漢語文献を扱ったものとして紹介している。また、「if the aspiration of “p,” “t,” “k,” etc. was stronger than that of “b,” “d,” “g,” etc.」とする部分の括弧 “ ” であるが、この論文ではこれを、パスパ文字やサンスクリットなど文字の転写を示すものとして使用している。これよりみて、当該部分をパスパ文字として扱っていることはまず間違いないであろう。しかしながらこれは誤解である。カールグレン 1915-1926 は、漢字音写モンゴル語文献を扱ったものであり、パスパ文字漢語文献を扱ったものではない。なお、カールグレン 1915-1926 およびそれに続くドラゲーノフ 1930 の説を紹介した箇所の英文は難解を極めるけれども、それは上記の誤解に基づいた記述であることに起因している。もっとも、橋本萬太郎 1967 は、カールグレン 1915-1926 の説もドラゲーノフ 1930 の説も否定しており、上記の誤解は氏の「パスパ文字の一部はデーバナーガリーに由来する」という魅力ある本論に影響は与えない。しかしながら、この種の誤解は、その後中国で出版されたものも含めて幾つかの研究書の中に見出すことができるので注意が必要であろう。